

単純 CT が診断に有用だった急性上行大動脈解離を発症した透析患者の 1 例

1) はまゆう会新王子病院 腎臓内科

2) 同 循環器内科

3) 同 リハビリテーション科

4) 同 外科

5 JCHO 九州病院 放射線科

6) 同 心臓血管外科

宮崎 三枝子¹⁾、西島 博満²⁾、惣明 靖元¹⁾、牧野 健一郎³⁾、瀬川 賀世子¹⁾、
箴島 明彦¹⁾、水島 明日⁵⁾、瀧川 友哉⁶⁾、田中 孝夫⁴⁾、市丸 喜一郎⁴⁾

【症例】75 歳女性。原疾患；腎硬化症，透析歴 24 年 7 か月。

【主訴】胸部症状と呼吸苦。

【現病歴】透析待合室で待機中に呼吸苦胸，胸部症状，両頸部痛，左肩痛と血痰を認めた。
頸静脈の怒張を認めたが湿性ラ音は聴取されなかった。非シャント上肢の血圧 202/98
mmHg, SpO₂ (room air) 96%，心電図や採血では虚血を疑う所見はなく胸部 X 線では心
不全を呈していた。

【経過】直ちに血液透析を施行し除水により症状はほとんど消失したが，少量の血痰と両
頸部痛は残存した。血痰の精査目的で行った単純 CT で上行大動脈壁の三日月型高吸収を認
め，造影 CT で偽腔開存型急性上行大動脈解離と診断され緊急手術が施行された。

【考察】同時に複数部位に痛みを訴える場合は大動脈解離も考慮する必要がある，本症例
では先行した単純 CT が診断に有用であった。